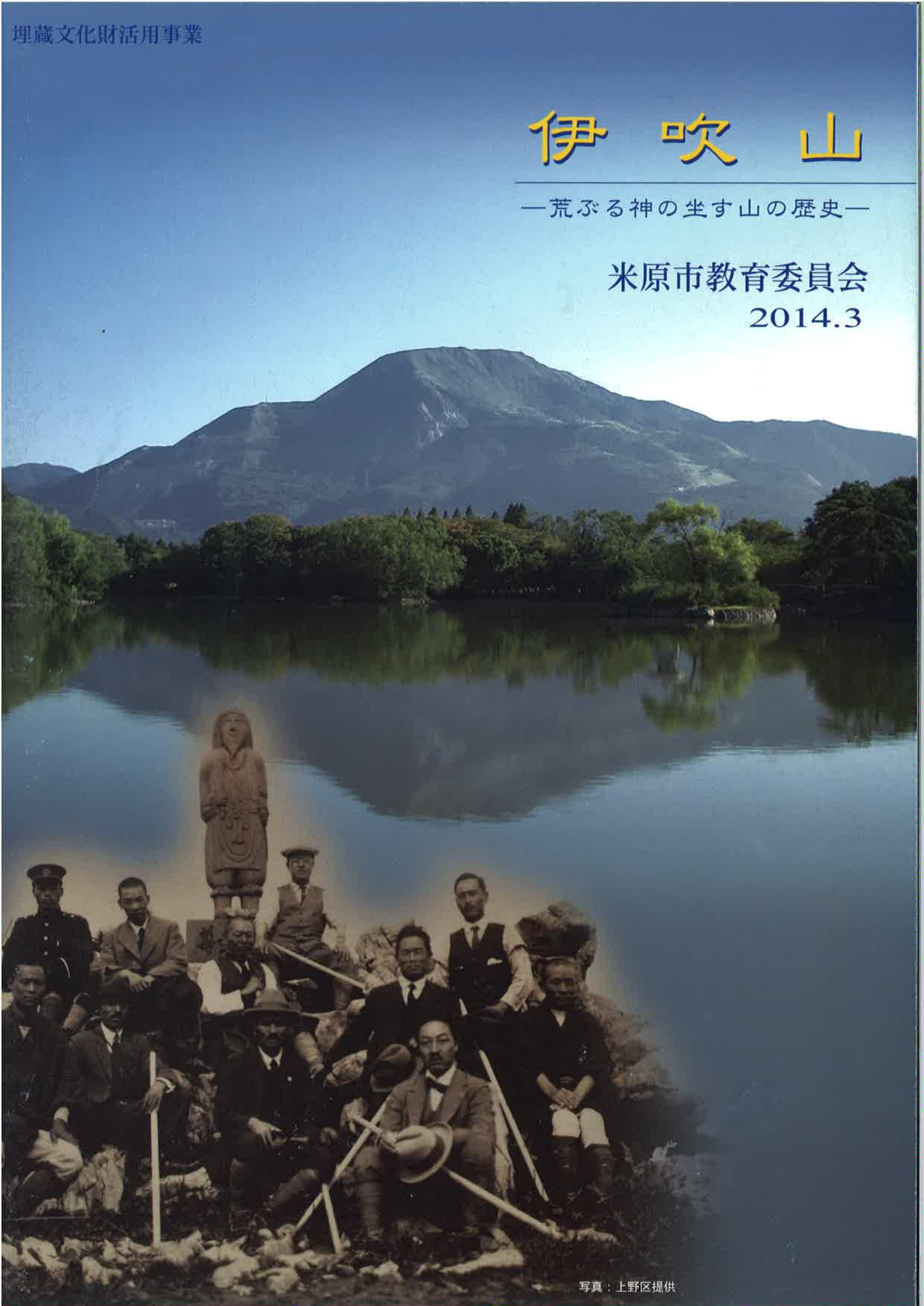
埋蔵文化財活用事業

伊吹山

—荒ぶる神の坐す山の歴史—

米原市教育委員会
2014.3



写真：上野区提供

伊吹山

―荒ぶる神の坐す山の歴史―

プロローグ
「古い山」と「真ん中」がキーワード

Ⅰ．荒ぶる神を生んだ伊吹山の自然……2
- ■ 伊吹山の地質
- ■ 厳しい自然
- ■ 薬草の宝庫
- ■ 出雲井　―水を生む山―

Ⅱ．古代人がみた伊吹山……5
- ■ 縄文人の祈り
- ■ ヤマトタケルと白猪
- ■ 古代の説話・伝承
- ■ 鬼が棲む山―中世―

Ⅲ．伊吹山山岳信仰の展開……9
- ■ 不屈の行者の誕生　―伊吹山行者列伝―
- ■ 蓮上の弥勒堂と山中の行場
- ■ 伊吹山の一山組織
- ■ 山にのこる寺、下りる寺

Ⅳ．伊吹山の仏教美術……17
- ■ 山岳信仰を語る古仏
- ■ 修験行者のすがた

Ⅴ．円空・播隆と伊吹山……19
- ■ 作仏聖・円空と伊吹山
- ■ 念仏行者・播隆と伊吹山

Ⅵ．伊吹山と生きる……21
- ■ 伊吹山を描いた絵図
- ■ 伊吹山をとりまく太鼓踊り
- ■ 伊吹山と人びとのくらし
- ■ 信仰登山から観光登山へ

エピローグ
いぶきやまといぶきさん……25

プロローグ　「古い山」と「真ん中」がキーワード

伊吹山の化石は、約３億年前の暖かい海の底のサンゴ礁の生き物たちです。伊吹山は、大陸の移動で約１億5000万年前に隆起した"古い山"です。また、北から若狭湾が、南からは伊勢湾がせまる本州のいちばん狭いところにあり、いつの時代も人や物、文化、自然が行き交う、東西日本の"真ん中"にあります。標高1377メートルで、日本の山のなかでは「低山（ていざん）」に分類される伊吹山が、最古の歴史書『古事記（こじき）』『日本書紀（にほんしょき）』に登場し、全国の山でもまれなお花畑が広がっているのはなぜでしょうか。それは、古い成り立ちとその位置に、大きな要因があります。そして、つねに人とかかわり続けてきた山なのです。美しいお花畑を代表とする雄大な自然とともに、悠久の歴史が、伊吹山の自慢です。さあ、伊吹山の歴史トレッキングに出発しましょう。

■伊吹山の地質

伊吹山は標高1377mの起伏山塊で，典型的な石灰岩地帯に属し，山頂には、天然の凹地のドリーネや石灰岩が柱状に林立するカレンフェルト地形、巨大な石灰岩の露岩がみられます。九合目あたりの登山道には、手を突かなくては登れないような岩場があります。これらの奇岩、巨岩や洞窟は修験道の行場としての役割を果たしました。西側斜面は石灰岩の断層崖で「白じゃれ」「大富抜け」等の崩壊崖がみられ、ここにも、蔵之内や不動の滝などの行場となる独特の地形がみられます。

伊吹山の石灰岩は、約３億年前のサンゴ礁の生き物たちの遺骸のかたまりです。近世には、山中で石灰窯が経営され、近代になると、こうした断層崖は、セメント原料の貴重な資源として採石がおこなわれました。

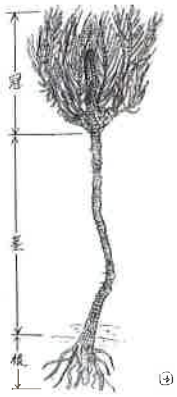
■厳しい自然

伊吹山付近は、本州の最も狭い部分で、伊吹山を南端とする美濃・越前山地稜線と中部山脈、丹波山地、鈴鹿山地に囲まれているため特徴的な気候を示します。

伊吹山および伊吹地域は，気温が低く降水量が多いうえ特に冬期に積雪が多く、日本海気候区北陸型に属します。冬は若狭湾からの北西風、夏は伊勢湾からの南西風の強い風が多く吹きます。山頂は一年を通じて霧が多く、山頂の霧日数は年間平均300.8日(1918～1988)となっています。

最深積雪は11.82m(1927.2.14)で、世界山岳観測史上１位です。また、日最大降雪も2.3m(1975.1.14)で、こちらも世界一の記録です。また、濃尾平野に伊吹颪が吹きすさび、伊吹の名の由来は、この吹き降ろす山の神の「息吹き」。この強い風に由来するといいます。これらの高地特有の気候のため、大正８年、いち早く山岳気象測候所が建設されました。

人の力ではあらがいようのない自然の猛威が、伊吹山の荒ぶる神の姿かもしれません。



3億年前の生き物・ウミユリ

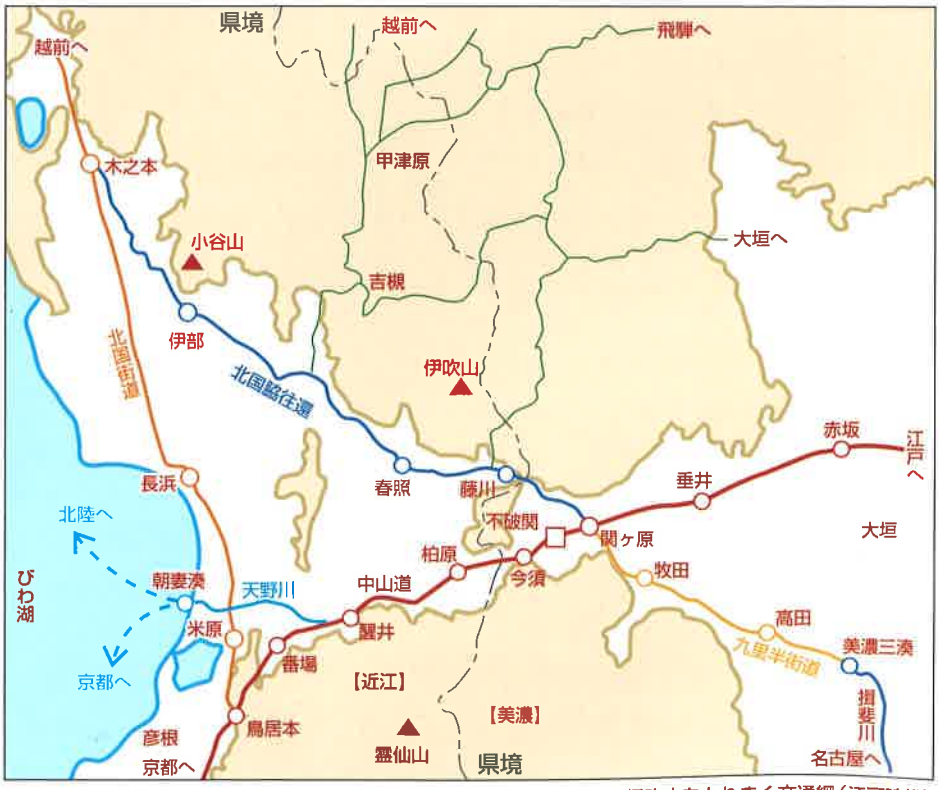
ウミユリの化石

眼下に広がる眺望

伊吹山は滋賀県(近江国)と岐阜県(美濃国)との境にあり、南の霊仙山との地峡部を東山道(中山道)が通り、古代三関のひとつ不破関(岐阜県関ヶ原町)が至近距離にあります。山麓は、まさに東西文化の接点であり交差点。街道や峠道、舟運が交錯し、政治上、戦略上、常に重要な位置を占めてきた場所です。山頂からは、東に濃尾平野、西は近江国を一望することができます。

初代・伊吹山測候所(大正8年建設／絵葉書)

山頂にあった避難小屋(絵葉書)



伊吹山をとりまく交通網(江戸時代)

■薬草の宝庫

山頂のお花畑

伊吹山の植物の特徴として、①古い山なので、氷河期に北極周辺から日本に入り、南下したと考えられる、本来1500メートル以上の山でしかみられない高山または亜高山性植物。②同じく、古い山のためにこの山で独自に進化し、日本中で、伊吹山でしか見られない固有種(特産種)。③世界一の積雪記録をもつ伊吹山なので、日本海側斜面に発生したり、分布の本拠をもつ植物。④石灰岩地を好む植物。⑤南方系の植物や、中国東北部や朝鮮に本拠をもつ温帯性の植物。などが分布しています。真ん中の山ですから、植物も永い年月をかけて、あちこちから伊吹山にたどりついたのです。また、伊吹山は、古来薬草の山として知られ、伊吹山に生育する植物約1300種のうち約280種が薬用植物とされます。延長(えんちょう)5年(927)完成の『延喜式(えんぎしき)』には、近江国73種、美濃国63種の薬種が記載されています。織田信長が、ポルトガルの宣教師(せんきょうし)に命じて伊吹山に薬草園を開かせたことが、江戸時代の書物に記載されています。また、江戸幕府の採薬師(さいやくし)がたびたび伊吹山を訪れました。この地域の人々は薬草に親しんで生活し、採取して出荷、栽培に取り組んできました。なかでも、伊吹もぐさは大宝律令(たいほうりつりょう)以来医薬(いやく)とされ、江戸の末期の山麓では、もぐさを取り扱う農家や、北国脇往還(ほっこくわきおうかん)の春照宿(すいじょうじゅく)にはもぐさを商う店が5、6軒あったと記録されています。山麓登山口の集落上野(米原市)では、明治初年の物産誌に薬草商3軒、明治14年には11軒があげられています。

薬草(センブリ)

薬草(イブキジャコウソウ)

■出雲井 ―水を生む山―

伊吹山の里宮(さとみや)といえる伊夫岐神社(いぶきじんじゃ)付近で、姉川から取水する「出雲井(いずもゆ)」は、大原荘(おおはらしょう)16ヶ村(米原市大原学区と春照(すいじょう)・高番)と相撲庭(すまいにわ)(長浜市)の水田を灌漑する用水で、横山丘陵先端の龍ヶ鼻(たつがはな)でさらに郷里井(ごうりゆ)となって、旧長浜市北東部の郷里庄(ごうりしょう)15ヶ村の水田を灌漑します。さらに、その落ち水の行方などを加えると、旧長浜市域の大半がその影響下にあるという、巨大な灌漑面積を有する用水です。

出雲井「小田分水」

― 奇岩、巨岩が林立する奇観(きかん)。風、雪、霧、雨が多く、激しい気候の変化。有毒なものを含む薬草の存在。そして日本の農村社会に欠かせない水。伊吹山は、文字通り荒ぶる神の坐(いま)す山であり、修行して神の力を得るには適した自然環境の山なのです。―

Ⅱ．古代人がみた伊吹山

■縄文人の祈り

伊吹山麓は、滋賀県内で縄文遺跡が密集する地域として知られています。その分布は、姉川上流の河岸段丘上（かがんだんきゅうじょう）および、弥高川（やたかがわ）などが形成する扇状地（せんじょうち）上にあり、約4000年前の縄文中期から、伊吹山の水と恵みをよりどころに集落が営まれてきました。これらの集落からは東日本特有の土器や石棒（せきぼう）が出土して、この時代から東西交流の接点であったことを物語っています。石棒は広場などに立てた信仰の道具で、その出土は滋賀県では伊吹山麓に集中しています。このころすでに、伊吹山に対する原始信仰が芽生えていたようです。また、縄文人は、山頂に最初の足跡を残しており、縄文時代の石鏃が山頂で採集されています。山の頂や、高山の山頂近くから石鏃（せきぞく）が出土した例は、比叡山（ひえいざん）や白山、八ヶ岳、富士山などでみつかっていて、いずれも美しい山容の山です。

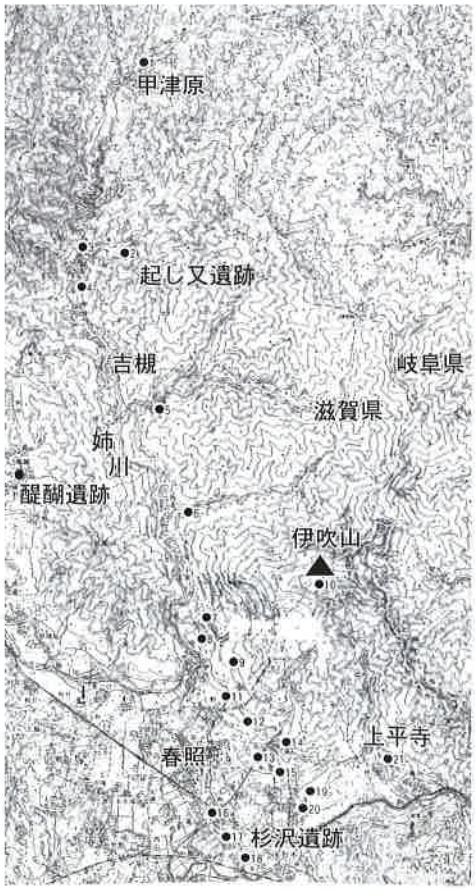
伊吹山頂出土の石鏃

杉沢遺跡から伊吹山を望む

石棒（伊吹遺跡）

醍醐遺跡（長浜市）の縄文土器

起し又遺跡の縄文土器



伊吹山周辺の縄文遺跡

山頂の石鏃

伊吹山山頂では、昭和12年５月、９月、10月の５点の石鏃を皮切りに、測候所職員や山小屋経営者により、これまで14点の石鏃と１点の石のナイフ、石を割ったくずがみつかっています。山頂には窪地や湿原があり、伊吹山の鳥獣が集まる猟場だったのかもしれません。平成18年６月には、四合目で石鏃がみつかり、山麓の縄文人が盛んに山に登っていたようすがうかがえます。つづく弥生時代の遺跡は見つかっていません。

■ヤマトタケルと白猪　―古墳時代―

伊吹の神は、神話の英雄「日本武尊（やまとたけるのみこと）」を退け、死に至らしめた荒ぶる神として『古事記（こじき）』(712年)に登場します。荒ぶる神は、朝廷が信仰する神に従わない土着（どちゃく）の神のことで、これを信仰する一族が伊吹山に拠っていたとも考えられます。また、人の力ではどうすることもできない、伊吹山の豪雪や強風などの厳しい自然環境を示すのかもしれません。

タケルは、12代景行（けいこう）天皇の息子で、５世紀の物語とされます。荒ぶる神の話を聞き、これを鎮めるために素手で伊吹山に向かいます。山中で神の化身「白猪（しろいのしし）」と出会い、これを神の使いとみたタケルは挑発的な言葉を吐きます。怒った伊吹山の神は、氷雨を降らせてタケルを打ち惑わせます。下山したタケルは、山麓の清水で目覚めるものの、伊勢へ向かう途中で亡くなってしまいます。

『日本書紀（にほんしょき）』(720年)では「大蛇」が神の化身です。猪は子どもをたくさん産むことから豊穣の象徴であり、大蛇は水の神で、仏教と結びついて龍になります。ふたつの動物が伊吹の神の化身であることは、山の神が「水の神・農耕の神」として信仰されていたことを物語っています。猪、蛇、いずれも縄文的な荒々しい神のすがたでもあります。

日本武尊像（大正9年／泉亮之作／上野区蔵）

ヤマトタケル遭難の地（伊吹山四合目の高屋）

白猪のマスコット「イブちゃん」（上野区）

山麓の古墳

米原市上野では、山麓の水田と樹林帯の境でミミ塚古墳と人塚古墳の発掘調査がおこなわれました。６世紀末から７世紀初頭の古墳時代後期（約1400年前）の古墳です。水田のなかに大きな石灰岩が露頭したふたつの塚があり、昔から「ミミ塚」「人塚」とよばれ、一説には関ヶ原の戦いに由来する塚といわれていました。周辺には「大塚」という地名もあり、後期群集墳（ぐんしゅうふん）の存在が推定されます。ミミ塚古墳は、周溝（しゅうこう）が巡る、直径約15mの円墳（えんぷん）で、横穴式石室には伊吹山の石灰岩が使われていました。土師器（はじき）や須恵器（すえき）などの土器、鹿角製柄付（ろっかくせいえつ）きの鉄刀（てっとう）と鉄製鍔付（てつせいつば）きの鉄刀や鉄鏃（てつぞく）、馬具（ばぐ）、金銅製（こんどうせい）の耳飾りなど、死者にささげた副葬品（ふくそうひん）と、人骨片などが出土しました。人塚古墳も、直径約11.4m前後の円墳です。米原市山東（さんとう）地域の平野部全体が見渡せる、滋賀県で最も東の古墳です。

ミミ塚古墳からの景観

復元されたミミ塚古墳（伊吹山文化資料館）

■古代の伝承・説話

古代人にとって、東国への入口に立ちはだかる厳しい山。都のはるか東北、鬼門の地にそびえる神奈備型のこの山のむこうには、異なる世界が広がっている…。伊吹山は、都人にとって、そんな山だったのではないでしょうか。

伊吹山（右）と小谷山（浅井岳）

浅井岳との背比べ —『帝王編年記』—

養老年間（717～724）のこと、伊吹山（夷服岳）の神（多々美比古命）と浅井岳の神（浅井比命）は、伯父と姪の間柄です。あるとき、この２人の神が背比べをしたところ、浅井岳が一晩で背丈を増したため、怒った伊吹山は刀を抜いて浅井岳神の首をはねました。その首は琵琶湖に落ちて島となり、竹生島と名づけられました。荒ぶる神が棲う伊吹山のもうひとつのエピソードであり、屹立する山容と、いったん荒れると激しい気象の変動がイメージされたものといわれます。

伊吹山から近江を眺める

藤原武智麻呂の伊吹登山 —『藤氏家伝』—

和銅５年（713）、藤原武智麻呂が近江守となり、国見のために伊吹山登山を試みたところ、地元の村人が日本武尊の遭難の故事を申し出て、登山の中止を訴えました。あらためて、武智麻呂は精進潔斎して山に挑みます。途中で１匹の蜂が武智麻呂によりますが、これを手で払いのけ無事登山することができました。この物語では、タケル神話の神の化身、白猪が蜂に変わっています。自然の猛威を表す荒ぶる土着の神が、朝廷が奉じる国津神に取り込まれたことを示しているのかも知れません。

弥三郎の岩屋（伊吹山八合目）

甲賀三郎物語 —近江の昔話より—

信濃国（長野県）諏訪大社上下社に祀られているのは、甲賀三郎とその妻春日姫だと、地元では伝えられています。近江国に甲賀三郎という文武両道に秀でた美丈夫が住んでいました。ある日、春日姫と伊吹山に狩りに出かけましたが、妻のすがたが忽然と消えてしまいます。山中探しても見つからず、春日神社に祈願すると「信州の蓼科山の人穴にいる」とのお告げがありました。人穴に入った三郎はいつの間にか大蛇となり、すでに蛇身となって諏訪湖に住む妻とともに諏訪の神になりました。伊吹山に、異界につながる洞窟があったというお話です。

酒呑童子絵巻 —鬼に横道なきものを—

南北朝時代頃には伊吹山を舞台にした酒呑童子という鬼の絵巻が作られます。一条天皇の御世、都の若君や姫君が次々に失踪する事件が起こります。調べてみると伊吹山の酒呑童子の仕業とわかりました。これを、源頼光という武士と四天王が打ち取る物語です。頼光一行は、修験者に姿をかえ、毒酒をふるまって童子を酔いつぶして、その首をとります。「鬼に横道なきものを」と叫んだ首が、頼光の兜にかぶりつく凧絵が有名です。また、頼光が修験者に扮する内容は、山の宗教者である修験者の力が、仏教や道教をとりいれることで、山の神（ここでは鬼神）の荒ぶる魂を鎮める強い力をもっていたことを物語ります。

ちなみに、四天王のひとり坂田金時（金太郎さん）は、坂田郡黒田荘（米原市と長浜市の一部）の出身です。怪しい修験者が出入りする伊吹山は、武士の時代になっても近寄りがたい、畏れ敬われる山でした。

天の岩戸（岐阜県揖斐川町春日）

■鬼が棲む山―中世―

山の神の原始性や荒々しさは、伊吹山の神を恐ろしい神、悪神と印象づけ、中世になると鬼神として表現されます。

伊吹弥三郎　―イケメン大男かこわもての大盗賊か―

山をまたぐほどの大男。伊吹山には伊吹弥三郎が棲んだ岩屋やお風呂、百間廊下などがあります。力強く、なさけ深いという男の中の男で、大野木殿の娘を嫁にした弥三郎は、いつもお嫁さんをふところに入れて歩きました。そして、朝廷に逆らい、土地を荒らし、都から財宝や女性をうばう大盗賊の頭領弥三郎の話も、弥三郎伝説のひとつです。弥三郎には実在のモデルがあります。平氏との戦のほうびで柏原荘の地頭になった柏原弥三郎ですが、荘園を略奪し、朝廷に追われて伊吹山に隠れ住みます。都の人たちは「伊吹山の悪党」とよびました。弥三郎の子・伊吹童子は乱行を恐れられて比叡の山中に捨てられ、丹波の大江山に住んで酒呑童子となります。

『南総里見八犬伝』にも登場　―伊吹山の盗賊―

江戸時代後期の大衆小説『里見八犬伝』は、滝沢馬琴が制作した、「勧善懲悪」と「因果応報」をテーマにした日本古典文学史上最長最大（全98巻、106冊）の伝奇ロマンです。中世の関東を舞台に８人の犬士が活躍する波乱万丈の物語のなかで、里見家を窮地に追い込む八犬伝最強最悪の登場人物が蟇田素藤です。この素藤の父跖六が伊吹山の盗賊の頭領です。素藤は、父が捕まって上総館山に逃れ、まんまと館山城を乗っ取ってしまいます。

「伊吹童子」絵巻（東洋大学蔵）

Ⅲ．伊吹山山岳信仰の展開

■不屈の行者の誕生　―伊吹山行者列伝―

日本武尊を撃退した伊吹山の荒ぶる山神。その聖なる山に入り、森をひたすら歩き、山にこもり、岩場や滝、洞窟で修行することで、伊吹山の神仏と交わり、清められ、その力をいただいて不屈の行者になるために、たくさんの山伏が伊吹山で修行しました。修験道の開祖とされる役行者(634～706)は、白鳳２年(673)弥高赤谷の峰に寺を開きました。悉地院(上野)や惣持寺奥の院（長尾寺跡／大久保）にはその像があります。行基（668～749)も弥高寺に足跡をしるしています。白山を開いた泰澄(682～767)は、天平神護年間(765)弥高寺を再興。上平寺(大谷寺)の創建が伝えられています。最澄(767～822)に関しては、観音寺に伝教大師坐像(重文・1224作)があります。空海(774～835)伝承や、その師である唐の密教僧恵果(746～806)の作と伝える毘沙門天が惣持寺にあります。伊吹山寺を創建した三修の高弟松尾童子は、白鳳年間(674頃)伊吹山に松尾寺を創建しました。

阿弥陀ヶ崩（上野区提供）

手掛岩（九合目）

行導岩（平等岩／八合目）

不動の滝（太平寺）

■蓮上の弥勒堂と山中の行場

伊吹山の山頂は「蓮上」とよばれました。山での修行の最終目的地のことで、広い山頂が、神仏が坐られる「蓮華坐」だとされました。伊吹山山岳信仰の中心的な施設は山頂の弥勒堂です。かつて、ここには多くの石塔・石仏が祀られていました。弥勒堂は奈良時代に伊吹山寺を開山した三修上人が、亡くなって昇天した聖地ともいわれています。また、かつて弥勒堂に祀られていたという、鎌倉時代頃の弥勒石仏が、伊吹地区の秋葉さんに移されています。山頂からは、明治12年に三角点が設置されたとき、弥勒仏１体、刀剣２振、鏡２枚が出土し、最近では数枚の寛永通宝が採集され、山岳信仰の撒き銭に伴う遺物と考えられます。今後も山岳信仰関係の遺品が見つかるかもしれません。

中腹から山頂にかけて、行導岩(平等岩)、手掛岩、雨降岩、鳶の岩、阿弥陀ヶ崩、地獄谷、蔵之内、不動の滝、弥三郎の岩屋などの修行場があります。二合目シャクシの森は、杓子、石神とも書き、石灰岩の磐座と白山神社が祀られています。周辺には、大門、小高野、日ノ丘、北大門などの地名があり、松尾寺跡と推定されています。

八ッ頭・白竜さん（山頂）

百間廊下（山頂）

■伊吹山の一山組織

伊吹山護国寺と三修

伊吹山は平安時代の初めには、比叡・比良・神峯・愛宕・金峯・葛木などの諸山とともに、薬師悔過の修行場として「日本の七高山」のひとつに数えられました。伊吹山寺の創建については、『三代実録』元慶2年(878)2月13日の条が文献の初見です。これによると、仁明天皇期(833～850)に「一精舎」が建てられ、仁寿年間(851～854)に三修(829～900)が伊吹山に登ってから「舎堂」が増え、元慶2年(878)、国家公認とでもいうべき定額寺に列せられました。この頃には、寺院として規模も内容もある程度整備されていたと思われます。

弥勒堂(山頂)

白山神社と磐座(二合目)

シャクシの森(二合目)

伊吹山の一山組織

伊吹山護国寺が発展・展開して、弥高寺・太平寺・観音寺・長尾寺の通称伊吹山四カ寺が成立します。四カ寺はそれぞれ伊吹山中の各尾根にあり、いずれも「護国寺」を称します。伊吹社(伊夫岐神社)の神事が四カ寺共同で執行されたことなどから、伊吹山護国寺から四カ寺が派生し、共存状況にあったことが中世伊吹山の特徴です。山中の寺は山寺(山林寺院、山岳寺院)とよばれます。

さて、伊吹社とともに伊吹山信仰の重要な社は、伊吹山麓の登山口にある三宮社(三之宮神社)です。伊吹社とともに史料で「両社」と表現され、祭礼・遷宮等はやはり四カ寺の協力によって執行されました。伊吹山の登山道は、現在でも三之宮神社の境内から始まっています。

「三之宮」の名称は諸説ありますが、伊吹山頂の弥勒堂を一之宮(上宮)、磐座がある二合目のシャクシの森を二之宮(中宮)、山麓の社を三之宮とする説が有力です。

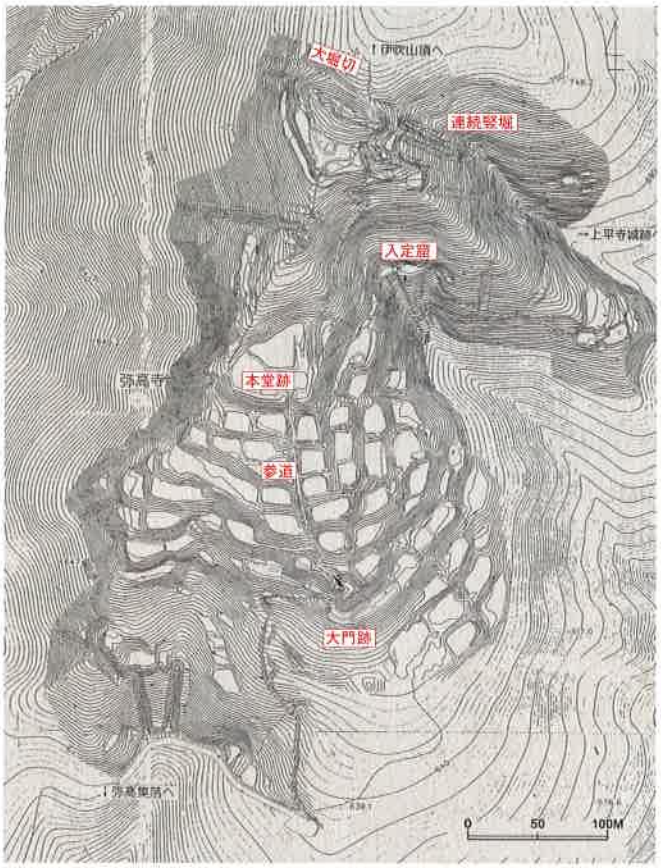
そして三宮社には大切な役割がありました。山頂を目指す修行を「大乗峰斗藪」といいますが、伊吹山においては三宮社が「一宿」でした。一宿とは、伊吹山への峰入りの行路上にある最初の宿(霊場)であり、修行者が集まり先達を雇う町場をさします。

伊吹大神を伊吹山寺の護法神として祀る伊吹社、登山口であり、山内の最初の聖地である一宿としての三宮社、この両社の社務を協力しておこなう四カ寺、この二社四寺によって伊吹山の一山組織が成り立っていました。

伊夫岐神社(伊吹)

三之宮神社(上野)

弥高寺跡から琵琶湖に沈む夕日を望む



弥高寺跡平面図

弥高寺跡（弥高）

伊吹山から南に張り出す尾根の中ほど、標高約700m付近に築かれた山寺で、地元では弥高百坊といわれています。役行者や加賀白山の泰澄の入山伝承があり、その位置や規模から伊吹山寺の中心的寺院だと考えられます。60を超える坊跡群は、東西約250m、南北約300mの範囲に集中し、本堂跡は約68m×59mを測り。中央に基壇状の高まりがあり、最大で18m四方の南面する建物を想定することができます。山寺跡の多い滋賀県でも、中世山寺の典型例で、高山中腹に大規模でまとまりのある姿を見ることができます。

一方では、戦国時代に京極氏あるいは浅井氏によって城塞化されています。永正９年(1512)、失火により焼失しましたが、天文９年(1540)の文書にもその坊名がみられ、天正８年(1580)に山の西麓へ移りました。

発掘調査の成果

本堂跡の発掘調査では、直径90cm前後の礎石を検出しましたが、残り具合が悪く間隔も統一されていないため本堂の構造は不明です。基壇側面では二段の石積みを検出し、ここまで縁が張り出した大きな建物だったと考えられます。礎石や石積みは焼けて細かく割れており、記録にみえる永正９年(1512)６月の火災によるものと思われます。本堂の規模については、元禄５年(1692)の調書に「往古者七間四面」と記載されています。

僧坊跡の発掘調査では、三間×六間の庫裏と仏堂を兼ね備えた礎石建物を検出しました。庫裏では火床(囲炉裏)跡を山寺ではじめて確認しました。出土遺物は、明かりとりの土師皿(かわらけ)や貯蔵用の甕などが多くを占めますが、輸入品の青磁碗や、香炉・花瓶などの仏具、仏像の宝冠や山伏の持つ錫杖、古銭や釘などがあり、15世紀後半が中心です。

本堂跡

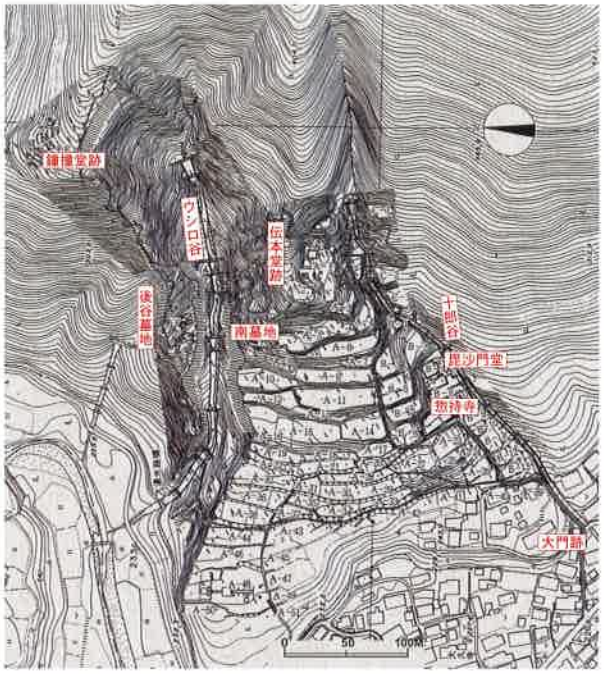
出土遺物（仏像の宝冠）

出土遺物（青磁碗）

僧坊跡

長尾寺跡（大久保）

伊吹山頂から北西に派生した尾根の先端にあり、姉川の段丘上に位置する大久保集落の背後に、南面する本堂（旧毘沙門堂）を中心に60ヶ所を超える坊跡群が、扇型に展開しています。中心部の標高は約240～325mで、かつてはさらに高い位置にあったといいます。墓地からは中世に属す瀬戸・常滑・渥美焼などの蔵骨器が出土しています。本尊天部形立像・毘沙門天立像（県指定）、山門額・縁起書（市指定）など多くの文化財がのこされています。創建当初は法相宗で、寺伝によると、白雉２年（651）に慈照尊者が開山したといいます。その後、伊吹山寺を構成する寺院となります。文和年間（1352頃）、長尾寺を再興した深宥は、姉川渓谷を阻む巨岩を砕いて水流を良くし、耕地を広げて住民の利益を図ったといわれています。永正年間（1504～20）、兵火で堂宇が焼失しますが、再建され49坊を数えました。



長尾寺跡平面図

太平寺跡（太平寺）

伊吹山から西に張り出す尾根の中ほど、標高約450m付近にあります。鎌倉時代には、弥高寺と伊吹山寺の本寺を主張し争いを起すほどの力を持ち、徳冶３年（1308）に和議が成立しています。元弘３年（1333）には、北近江の守護京極道誉とともに、太平寺に逗留していた亀山上皇の皇子守良親王を奉じて、東山道番場宿（米原市番場）で京都を追われてきた北条氏の武士団を全滅させる働きをします。京極氏は、太平寺の立地と施設を利用して、城郭にしていたともいわれています。太平神社（本堂か）を頂点にして、大門通りを中心に坊院が展開し、南端は大富川に面して中之坊跡・円蔵坊跡、北は上楽坊跡や奥之坊跡までの東西約200m×南北約300mの範囲が想定できます。

太平寺跡平面図

太平寺跡

観音寺（朝日）

観音寺は、鎌倉時代の正元年間（1259～60）に山を下り、伊吹山から南西に約５km離れた大原荘に移ります。大原荘の領家（仁和寺）と地頭（大原氏）の勧進によるものとされ、観音寺は、伊吹山の山寺から荘園鎮守へと性格が変化したことを物語ります。しかし、四ヶ寺による祭礼には参加して一山組織であり続けました。観音寺には、伊吹山寺を解明するうえで随一の豊富な古文書『大原観音寺文書』が伝承されています。

観音寺本堂

徳治3年の和与状（『大原観音寺文書』より）

太平寺跡（昭和28年）

■山にのこる寺、下りる寺

聖地と京極氏　―城塞化された山寺―

15世紀末の記録から、しばしば弥高寺に京極氏が陣を張ったことがわかります。さらに浅井氏によっても城塞化が図られたようで、お城にみられるような枡形虎口状の大門や本堂背後の連続竪堀群と大堀切などで、寺域の縁辺部を厳重に防御しています。また、伊吹山から派生する尾根頂部の山城としては非常に高い場所にある上平寺城跡（669m）も、山寺を、中世後期に土塁や堀切を築造して城郭にしたと考えられています。寺院の本堂基壇状の高まりをもつ主郭を頂点に、直線的に走る南北の独立した道の左右に、小規模な曲輪が規則正しく展開するあり方が、中世前期の山寺の形式であるとされます。京極氏の居城は、太平寺城、勝楽寺城、上平寺城など、いずれも山寺を利用しています。だれもが眺め、崇める近江第一の霊山聖地に居城を構えることで、その権威を示したのかもしれません。

その後の四カ寺

京極氏、浅井氏、大原氏という在地勢力の衰退、江戸時代の宗教政策の転換などにともない四カ寺はそれぞれ衰退、縮小の道を歩みます。弥高寺は、浅井氏滅亡数年後の天正８年（1580）に山麓に下り、さらに慶安２年（1649）に六坊が現在地に移って、いまでは悉地院が唯一法灯を伝えています。長尾寺は、元禄５年（1692）の調書によると、本堂、毘沙門堂、権現堂のほかに惣持坊、池之坊の二坊のみで、いまでは惣持寺が法灯を継いでいます。江戸時代に石灰窯を経営しながら山腹にのこった太平寺には、円空が止宿した中之坊や円蔵坊（真言宗／甘露王寺光明院（米原市加勢野）末寺）がありましたが、昭和38年１月に豪雪の中で孤立したことと、セメント工場の進出を契機に、昭和39年に観音堂とともに山麓に集団移住されました。

松尾寺出土の梵鐘（明応7年銘／市指定文化財）

再建された山寺　―伊吹山松尾寺―

松尾寺は、白鳳年間（674頃）に天武天皇の勅願により松尾童子が開基したとの伝承をもち、もとは法相宗の寺院でした。貞享年間（1684～1688）に黄檗僧秀水が入寺、彦根藩家老西郷氏や沢村氏の寄進により、山麓松尾の地に再建され、黄檗宗の学問道場となりました。幕末の農村革命者大原幽学も３年間ここで修行をしています。戦後、荒廃していましたが、昭和42年に、もとの二合目小高野に再建されました。松尾寺境内には享保13年（1728）創建の上杉神社があり、戦国武将上杉謙信を祭神としています。

弥高寺大門跡

上平寺城主郭跡

【図解：伊吹山信仰】

伊吹山山岳信仰に関連する遺跡のあり方から、山麓に里宮や修行の出発地があり、寺院は山腹に展開します(準聖域)。ここから上は厳しい修行の場を経て、神仏が棲まう山頂(聖域)。さらに、伊吹山を信奉する人々が住む流域(信仰圏)という区分けができそうです(模式図参照)。自然の猛威を畏れ敬う原始信仰と、古代日本武尊神話の「荒ぶる神」が、密教や道教などと結びついて伊吹山への山岳信仰が生まれました。

山頂

山頂一帯は「蓮上」とよばれました。山岳修行の最終目的地です。その中心的施設が弥勒堂で、このほか、山頂には経塚、三ツ頭、八ツ頭(白竜)、百間廊下、七高山石、地獄谷などの行場と伝えられる遺跡があります。登山口上野の雨乞いでは、かつて伊吹山中の寺社や洞窟などに願いをかけ、山頂弥勒堂前で松明を焚いて雨を祈りました(千束焚)。

山腹

修行者たちは、山腹の雨降岩、手掛岩、行導岩(平等岩)、弥三郎の岩屋(播隆風穴)、阿弥陀ヶ崩、不動の滝、目醒の滝などで修行をし、各尾根筋には、修験者や信者が集う山寺が隆盛します。江戸時代に全国各地に仏像をのこした円空や、槍ヶ岳を開いた播隆なども、伊吹山で最初に修行をしています。

山麓

伊吹の神を祀る伊夫岐神社は「里宮」であり、三之宮神社は「一宿」として、修行道の最初の聖地です。山麓には伊吹山信仰に伴う石造物があります。秋葉さん(米原市伊吹)の弥勒石仏は山頂にあったと伝えられる古仏です。伊夫岐神社の石造宝塔、大平観音堂の三重の層塔、平野神社の石造宝篋印塔などは伊吹山寺に関連する遺品です。

流域

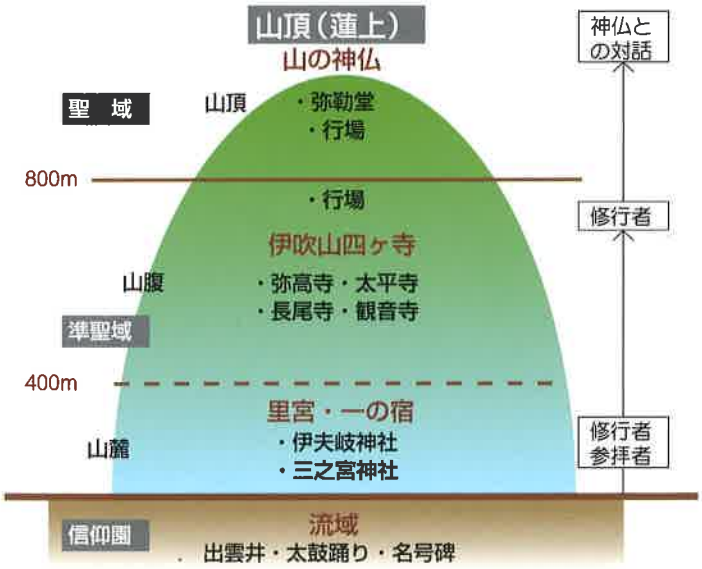
伊夫岐神社で取水される出雲井は、米原市北部と長浜市北東部の広大な範囲を灌漑し、流域の村々は伊吹山を水の神とします。太鼓踊りは、伊吹山を中心に滋賀県と岐阜県に分布し、山中の雨乞い場に参籠します。山麓には播隆上人の名号碑や軸が残り、講が結成されていました。

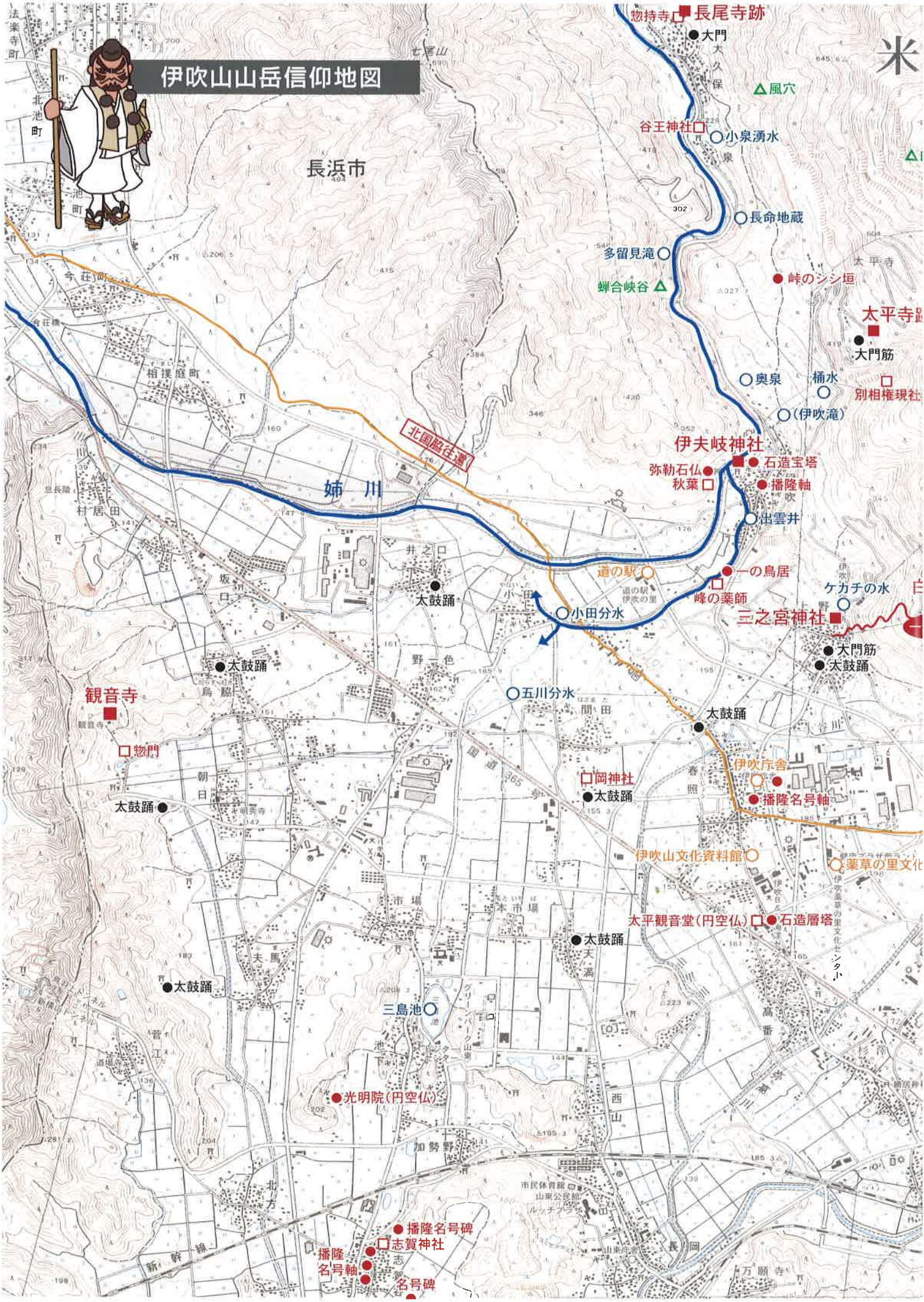
南の弥勒堂(山頂)

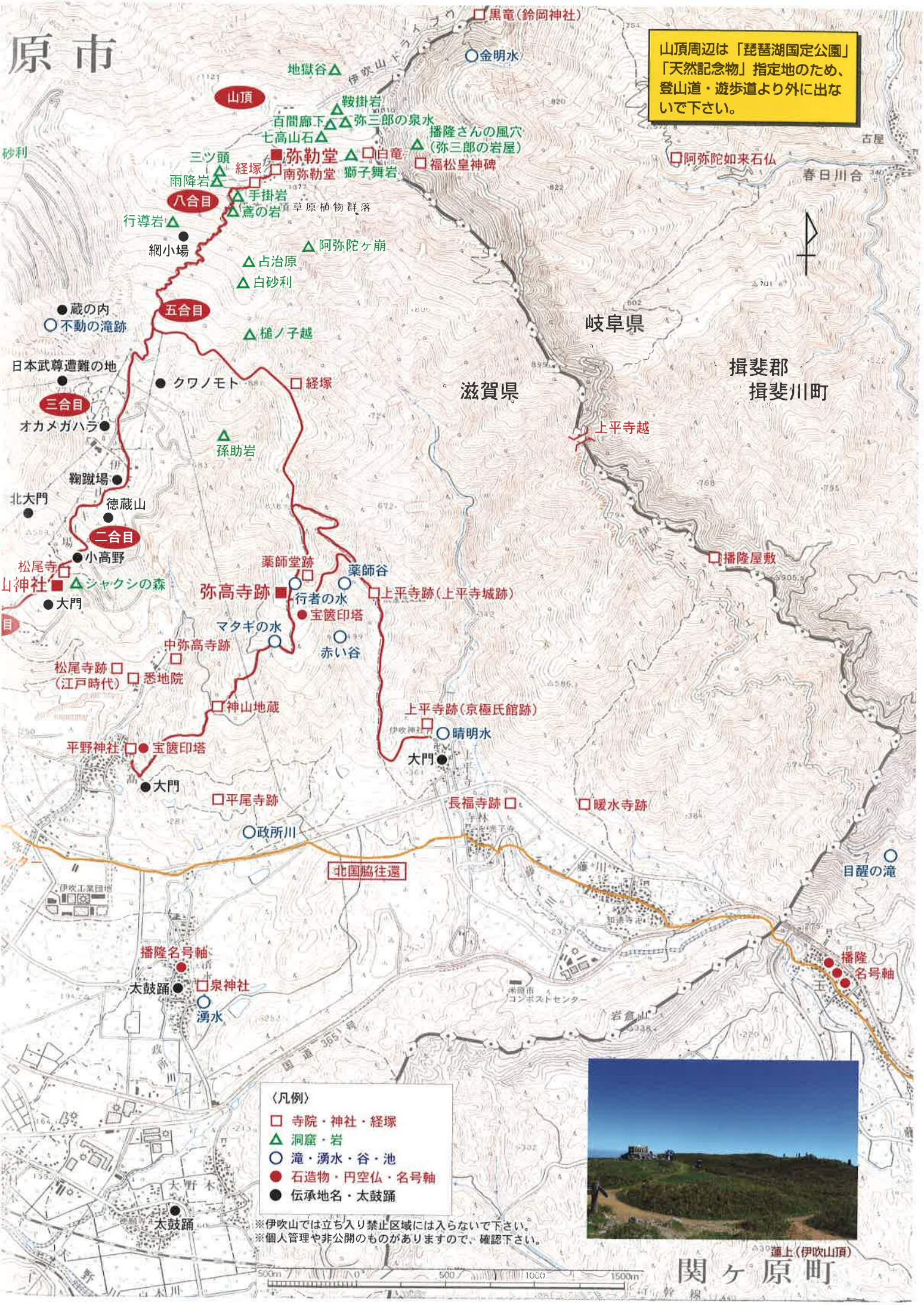
伊吹山奉納太鼓踊(上野)

秋葉さんの弥勒石仏(伊吹)

伊吹山山岳信仰模式図




伊吹山山岳信仰地図
長浜市
長尾寺跡
惣持寺
大門
風穴
谷王神社
小泉湧水
長命地蔵
多留見滝
蝉合峡谷
峠のシシ垣
太平寺跡
大門筋
奥泉
桶水
別相権現社
(伊吹滝)
北国脇往還
伊夫岐神社
石造宝塔
弥勒石仏
秋葉
播隆軸
出雲井
姉川
道の駅
一の鳥居
峰の薬師
ケカチの水
三之宮神社
大門筋
太鼓踊
小田分水
五川分水
観音寺
物門
岡神社
伊吹庁舎
播隆名号軸
伊吹山文化資料館
薬草の里文化
太平観音堂(円空仏)
石造層塔
三島池
光明院(円空仏)
播隆名号碑
志賀神社
播隆名号軸
名号碑


原市
山頂周辺は「琵琶湖国定公園」「天然記念物」指定地のため、登山道・遊歩道より外に出ないで下さい。
黒竜（鈴岡神社）
金明水
地獄谷
山頂
鞍掛岩
百間廊下
弥三郎の泉水
七高山石
播隆さんの風穴（弥三郎の岩屋）
三ツ頭
弥勒堂
白竜
福松皇神碑
阿弥陀如来石仏
経塚
南弥勒堂
獅子舞岩
雨降岩
手掛岩
八合目
鳶の岩
行導岩
網小場
阿弥陀ヶ崩
占治原
白砂利
蔵の内
不動の滝跡
五合目
槌ノ子越
日本武尊遭難の地
クワノモト
経塚
三合目
オカメガハラ
孫助岩
上平寺越
鞠蹴場
北大門
徳蔵山
二合目
小高野
松尾寺
山神社
シャクシの森
大門
薬師堂跡
薬師谷
弥高寺跡
行者の水
上平寺跡（上平寺城跡）
宝篋印塔
マタギの水
赤い谷
中弥高寺跡
松尾寺跡（江戸時代）
悉地院
神山地蔵
上平寺跡（京極氏館跡）
晴明水
平野神社
宝篋印塔
大門
大門
平尾寺跡
長福寺跡
暖水寺跡
政所川
北国脇往還
播隆屋敷
目醒の滝
播隆名号軸
太鼓踊
泉神社
湧水
播隆名号軸
岩倉山
太鼓踊
蓮上（伊吹山頂）
岐阜県
滋賀県
揖斐郡
揖斐川町
関ヶ原町
〈凡例〉
寺院・神社・経塚
洞窟・岩
滝・湧水・谷・池
石造物・円空仏・名号軸
伝承地名・太鼓踊
※伊吹山では立ち入り禁止区域には入らないで下さい。
※個人管理や非公開のものがありますので、確認下さい。

Ⅳ．伊吹山の仏教美術

■山岳信仰を語る古仏

伊吹山周辺には、三修が伊吹山寺を整備した平安時代前期から、四カ寺に分化発展した鎌倉時代頃の仏像の優品がのこっています。

大日如来坐像

大日如来坐像（庵寺観音講蔵）

伊吹山に伝わる像としては最も古いものです。伝教大師作と伝え、大正13年の勧進帳によれば、この像は、もと弥高百坊（弥高寺）に安置されていたといいます。地元では観音像として信仰されてきましたが、肘先が後に補われたものであるものの、おそらく当初から智拳印を結ぶ大日如来像であると考えられます。

像高41.1cm。髻から台座蓮肉部までを一材から彫り出し、内刳りは施しません。童子のような面貌と、分節のはっきりした体躯、そして右足首から裳先にかけて広がる緻密な衣文表現が特徴的で、中国盛唐後期から中唐頃の様式と、新しく日本に伝わった密教図像の影響が見受けられます。平安時代前期、９世紀前半頃に、中国か韓国からもたらされた図像に基づいて製作された異色の大日如来像です。

県指定　天部形立像（惣持寺蔵／大久保）

平安時代中期、11世紀頃の作と考えられます。もと、惣持寺の毘沙門堂の本尊として伝わりますが、両手が後補されているために尊名は不詳で、天部形立像とされます。像高179.3cmで、近在では珍しいハルニレの一材から頭体幹部を彫り出し、背中と腰下に内刳りが施されています。現状は素地ですが、当初は彩色像でした。

頭巾を思わせる長い革兜をかぶり、全体として薄手で平滑な甲冑を身につけます。細身の上半身に対して、腰甲を長くとり、臑を太くつくることから、スマートでのびやかな雰囲気があります。服制は、東大寺戒壇院四天王像など、奈良時代の痩身の武将像に近いとされます。面貌は、忿怒相でありながら、憂いを含んだ表情となっています。御前立となる木造等身の毘沙門天立像（県指定）が平安時代後期、12世紀頃の典型的な武将像であるのに対し、本像は粗野で型にはまらない原初的な作風が見られます。神像彫刻にも通じる山岳宗教の呪術的な雰囲気をもち、物静かな言い知れぬ迫力に満ちています。

天部形立像

惣持寺には平安後期の不動明王立像をはじめ、多くの仏像が安置されています。また、長浜市舎那院蔵の同時期の不動明王立像も、もと長尾寺安置の朱書きがあります。

■修験行者のすがた

役行者像

役行者像（悉地院蔵／上野）

役小角（役行者）は、７～８世紀の大和国葛城山の呪術師です。後世、山伏たちによって理想化され、修験道の開祖として仰がれます。

本像は、長頭巾をかぶる老相で、顎髭をたくわえ、痩身に法衣をつけ、高下駄をはいて、岩座に腰かけます。両手には、巻物や密教法具の独鈷杵、錫杖など持っていたかもしれません。両側に、役行者が使役したという前鬼、後鬼を従えます。

三修沙門坐像

三修沙門坐像（観音寺蔵／朝日）

三修（829～900）は、伊吹山護国寺中興の祖。法相宗と真言宗兼学の学僧で、入唐八家のひとり宗叡に真言宗を学びました。寛平６年（894）に維摩会の講師を務め、翌年に権律師に就任。昌泰３年（900）５月に72歳で亡くなっています。

幼いころから、名山を遊行し、仁寿年中（851～4）に伊吹山に至って、伽藍を再興。伊吹山護国寺として、定額寺（官認定の私寺）にすることに成功しました。

本像は、数少ない三修の彫像で、江戸時代の作です。老相で玉眼を嵌入し、衲衣と袈裟をつけます。右手に五鈷杵、左手に念珠を執ります。

伝教大師坐像

重要文化財　伝教大師坐像（観音寺蔵／朝日）

伝教大師最澄（767～822）は、平安時代初期の僧で、天台宗の開祖です。近江出身で、比叡山延暦寺を拠点として、湖北地域にも大きな影響を与え、数多くの天台寺院と仏教美術をのこしました。

本像は像高66.6cm。木造の一木造で内刳りを施します。頭巾をかぶり禅定印を結んで瞑想する姿に作られています。現状は素地ですが、当初は彩色像でした。像内の墨書銘から、貞応３年（1224）に造られたことがわかり、製作には同じ伊吹山四カ寺の長尾寺の関与がうかがわれます。

【像内墨書銘】「貞応三年大歳甲申十一年十□（四カ）／丁丑大師造立始大仏師□□‥／長尾寺住大乗（衆カ）分造□」

伝教大師坐像内刳

Ⅴ．円空・播隆と伊吹山

■作仏聖・円空と伊吹山

円空の生涯と伊吹山

江戸時代の伊吹山山岳修験のようすを詳しく知る資料は残されていません。しかし、生涯12万体造仏の祈願をたて、全国に5000体以上の神仏像をのこす作仏聖・円空(1632～95)や、槍ヶ岳開山で知られる播隆(1786～1840)が、その生涯を決定づける修行をおこなっていることから著名な修験の山であったことは明らかです。北海道伊達市有珠町・善光寺に安置されている観音像は、昭和52年に善光寺へ移されるまで洞爺湖中の島観音堂に祀られていました。背面に「うすおく乃いん小嶋　江州伊吹山平等岩僧内　寛文六年丙午七月廿八日　始山登　圓空(花押)」という刻書があることで知られています。

市指定　不動明王立像(光明院蔵)

背銘中の「伊吹山平等岩」は、伊吹山南面の八合目辺りにある大岩盤です。円空が「伊吹山平等岩僧内」と書くからには、江戸の当時、伊吹山に修行者集団がいたことを想起させますが、これを知る資料はのこされていません。「伊福山　法ノ泉の　湧出る　水汲玉ノ　神かとぞ思ふ」と歌に詠んで、伊吹山に対して並々ならぬ敬意を寄せている円空は、果たして何時、どのような修行をしていたのでしょうか。

十一面観音立像を読み解く

大平観音堂(春照)の十一面観音立像(市指定)は、180.5cmの堂々たる大作です。表情は柔和で優しいですが、刻線は強く全体のバランスもよく、円空の確かな腕の冴えがみられる優作で、代表作にも挙げられます。そして本像をさらに注目させているのは、その背銘です。背面一杯に、梵字、漢詩、和歌が墨書されており、その下に「元禄二己巳年三月初七日」(1689・58歳)という年月日と共に「四日木切　五日加持　六日作　七日開眼」という貴重な墨書があります。これによって、堅い桜の木のこれだけ大きな像を、円空はたった１日で彫り上げていたことがわかります。彫る前には木を清める加持に１日をかけ、彫った後に像に魂を入れる開眼にも同じように１日をあてています。この敬虔な態度と、円空の卓越した創造力と技術が付加され、独特の円空像が生れ、私たちの胸を打ちます。

最後の「中之坊祐春代」で、円空が訪れた時の「中之坊」の住職が「祐春」であったことがわかります。北海道へ行く前に平等岩で修行していた時も「中之坊」を拠点としていたのかもしれません。

市指定　十一面観音立像(大平観音堂蔵／撮影：寿福滋)

播隆上人開山の槍ヶ岳

■念仏行者・播隆と伊吹山

訪れる人「市の如く山の如し」

川合区有文書(岐阜県揖斐川町)や奥田家文書(関ケ原町)、生家の中村家文書(富山市)などから、播隆が南宮山奥の院(垂井町)や伊吹山で修行したのは文政6～9年頃です。文政年間、伊吹山を拠点に活動していたころに、笠ヶ岳再興、槍ヶ岳開山を成したのです。

伊吹山と向い合う南宮山(419m)の山上奥の院で山籠修行をしていた播隆は、霊夢によって伊吹山禅定へと移っていきます。

播隆屋敷跡(伊吹山)

『開山暁幡隆大和上行状略記』の「伊吹山千日別時の事」には、伊吹山に播隆屋敷とよばれる拠点があり、高所にもかかわらず三間に八間の草庵があったといいます。当時そこにあった阿弥陀如来の石像は揖斐川町笹又に残されていて、「文政八年八月　願主播隆上人講中」の銘があります。『行状記』には「江州越前美濃尾張の四ヶ国より群る人ぞ市の如く山の如く」と、播隆を慕って人々が集まってきたようすがうかがえます。集まった人々に播隆は、念仏起請文を配布しました。

関ケ原町玉の集落から伊吹山へ小一時間ほど登ったところに目醒の滝があり、播隆は一枚歯の高下駄をはいて岩場をすたすたと登り、冬でも単衣で念仏を唱えて修行したといわれ、子らに「虫を殺すな、父母の言うことをよく聞けよ」と説いたといいます。滝には祠があり、「文政九年　願主播隆上人講　玉村惣中江祭□　七月」と刻まれた30cmほどの青銅製のお不動様が鎮座しています。玉では毎年2月26日に不動祭を勤めています。

※写真：黒野こうき氏提供

目醒の滝(伊吹山)

播隆画像(可児市)

米原市内にのこる名号碑・名号軸

滋賀県内で現在のところ播隆の史料が確認されているのは米原市内だけです。伊吹山の山麓、大清水の個人宅に播隆名号軸が2幅、春照の個人宅に2幅、志賀谷の個人宅に3幅、伊吹の個人宅に帰命尽十方無量光如来の軸1幅があります。播隆名号碑は志賀谷の志賀神社と個人の墓にそれぞれ1基あります。川合区文書には、播隆の修行地を上野に移そうとしましたが剣山難所で参詣人が迷惑することから、志賀谷正覚寺一帯の信徒と南宮山参籠中の信徒のため「池ノ平」を播隆の修行地にすることを願い出た文書(文政8年)があります。このほか、文書からは、大清水、野一色、市場(米原市)や、相撲庭(長浜市)に信者がおり、講ができていたことがわかります。

播隆六字名号碑(志賀谷)

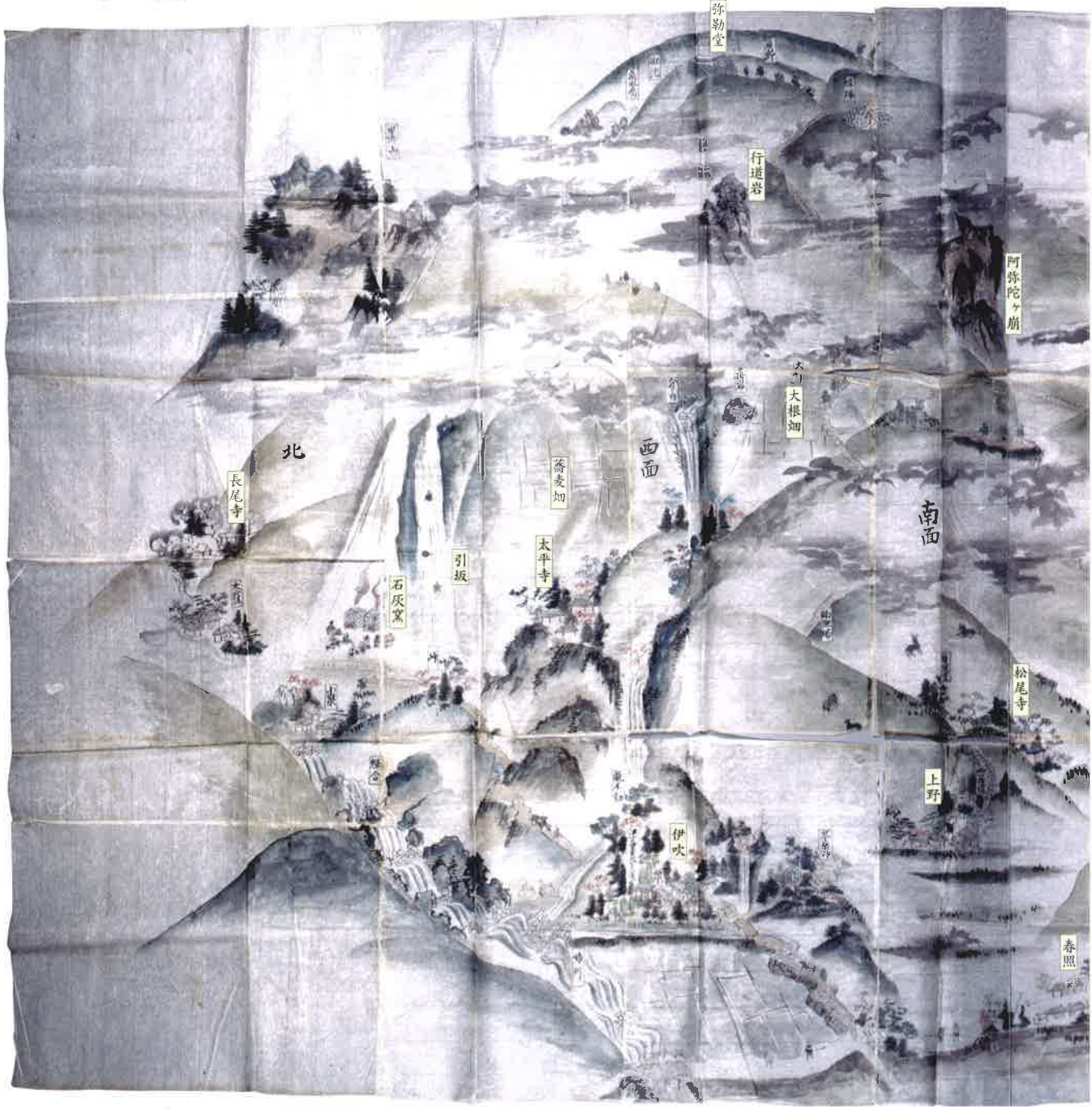
播隆上人六字名号(大清水個人蔵)

Ⅵ. 伊吹山と生きる

■伊吹山を描いた絵図

彦根藩井伊家に伝わる文書のなかに、伊吹山を描いたものが２点伝
根城博物館蔵)。絵図は、滋賀県側の伊吹山をほぼ全面に描き、山麓に

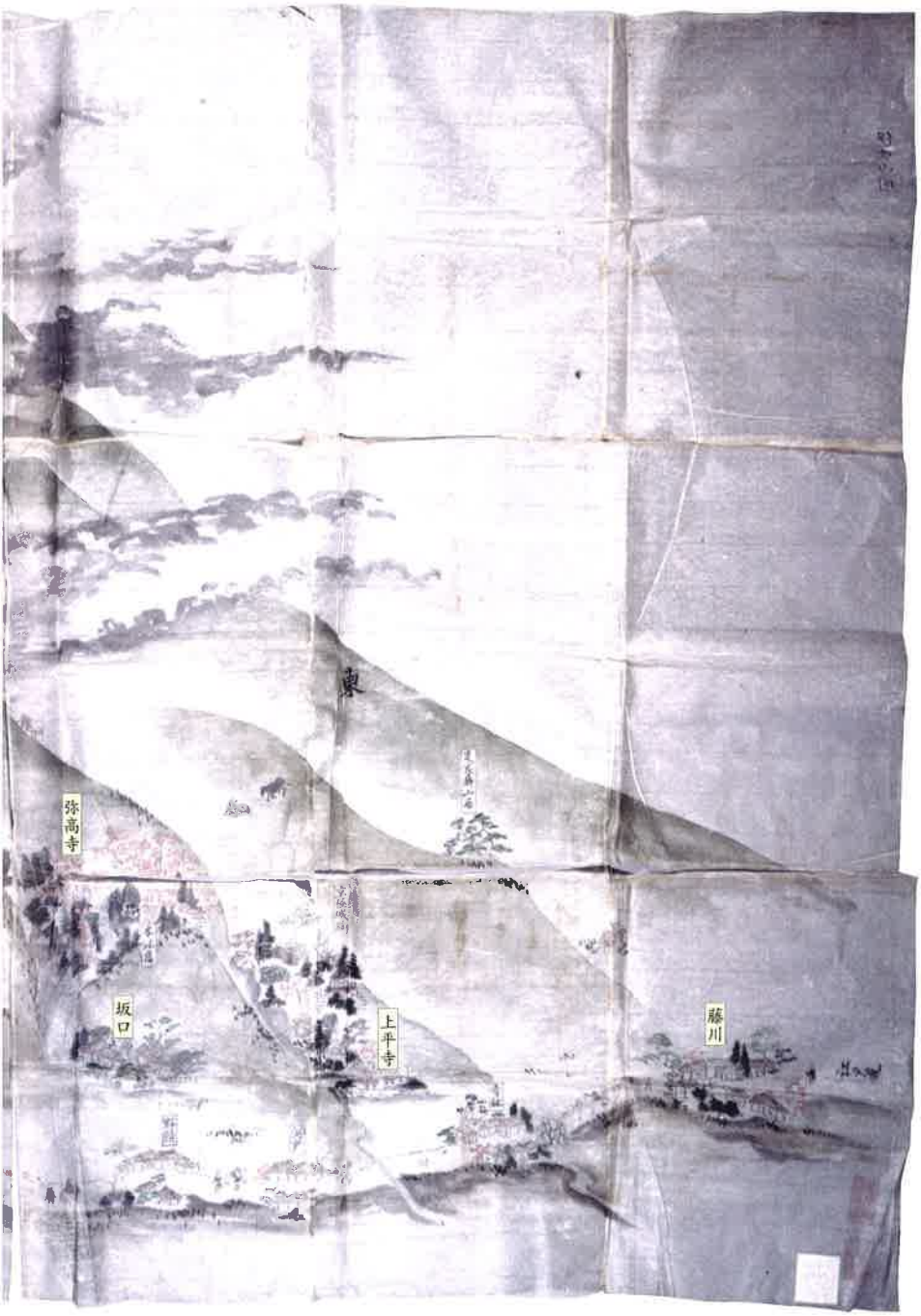
絵図には、小山や谷、尾根、河川などの自然環境が描かれ、歴史的
堂では、堂前で拝むように見える先達(せんだつ)と、それに続く信者や山頂から
施設などがあります。干し草を下ろす引き坂と人が描かれていて、山
元すると、山麓の樹林帯より上に大根やそばの畑があり、その周囲も
尾寺などの伽藍(がらん)が見え隠れしていたことでしょう。同時期に編さんされ
初より八月の候まで登山の諸人たえず」と、江戸時代の伊吹山登山の



られています。「元文己未(1739)一二月写」銘のある「伊富貴山之圖」と、年不詳の「伊吹山図」です（彦は「江戸道」と記された北国脇往還が描かれています。

観として、まず、山岳信仰に関連する社寺、行場と考えられる巨岩、奇岩、滝などがあり、山頂の弥勒(御来光)を眺める人が描かれています。このほか、京極氏の城跡、集落、道。田畑、石灰窯などの生産の草刈りが、18世紀にはおこなわれていたことが確認できます。絵図から江戸時代の伊吹山の景観を復刈り場として草原が広がっていたことがうかがえます。山腹や山麓の樹間からは、太平寺や長尾寺、松た『近江輿地志略』(1734年)には「弥勒禅定(修行)の人のみにあらず、薬草をとる人草木を商う者、四月のうすが記されています。

伊吹山図（彦根城博物館蔵）



伊吹大根

伊吹大根と伊吹そば

絵図では、一合目付近から上が草原になっており、さらに、「大平」の上に畑の区画が描かれ、「大根畑」とあります。大平は、三合目の旧ホテル前のオカメガハラから四合目斜面のことと思われ、辛味の強い伊吹大根とよばれる特産種が栽培されていたようです。また、西側斜面の太平寺より上の斜面には「蕎麦畑」が描かれています。そばは伊吹山が発祥の地とされます。伊吹大根はそばの最適の薬味です。

■伊吹山をとりまく太鼓踊り

山麓の太鼓踊り

春照八幡神社太鼓踊の山伏と法印

江戸時代、米原市上野の雨乞いでは、氏神への参籠や伊吹山中の社寺への祈願、山頂では、弥勒堂の前の窪地で松明を焚く千束焚がおこなわれ、雷踊りを踊って降雨を祈りました。太鼓踊りも雨乞いのひとつで、現在では、秋祭りにお礼の踊りがおこなわれます。

太鼓踊りが多く伝承されている滋賀県でも、米原市内の伊吹山麓地域はとくにその分布が濃密で、現在でも９つの地区で太鼓踊りが踊られています。200名近い大人数で踊られる伊吹地域の上野と春照の太鼓踊り、山東地域では大野木（いずれも県選択）のほか、朝日（国選択）や井之口（市指定）をはじめとする大原学区の太鼓踊りは、大原荘の総鎮守岡神社に合同で奉納されます。かつては山麓のほとんどの集落で踊られていたようで、踊り歌や記録、太鼓や背中につけた竹飾りの「ホーロー」などがのこされています。

また、伊吹山を挟んだ岐阜県側の揖斐・不破両郡にも同様の太鼓踊りが伝えられています。それより東では伝承されていません。不破郡関ヶ原町の太鼓踊りは、米原市の太鼓踊りと類似点が多くありますが、揖斐郡内の太鼓踊りは「鎌倉踊り」などとよばれ、衣装、円錐形や扇形のシナイ・ホロといった背負い物、シャグマなどの被り物などかなり違いがあります。にもかかわらず、坂内村では太鼓踊りが「江州（木之本）から伝わった」と言われていることや、大正時代まで、峠を越えて太鼓の貸し借りがあったことなど、伊吹山地を中心として「太鼓踊文化圏」があり、水を与えてくれる伊吹山への民間信仰をみることができます。

下余呉の太鼓踊（長浜市）

当目の太鼓踊（長浜市）

朝日の太鼓踊（米原市）

寺本の太鼓踊（揖斐川町）

春照の太鼓踊（米原市）

大野木の太鼓踊（米原市）

伊吹山周辺の主な太鼓踊り分布図（町村名は合併以前）

■伊吹山と人びとのくらし

山での草刈り

一合目から山頂にかけての南西斜面では、田畑の肥料や家畜の飼料のための採草がおこなわれてきました。農耕用の牛が耕運機に変わり、化学肥料が多量に出回るようになる昭和30年代後半まで続きました。上野では、一合目から山頂の測候所あたりまで、風が強く草が生えにくいところや、急斜面、大きな岩があるところ以外は草刈り場でした。

三合目のユウスゲ群落

採草の時期は、梅雨明けの夏から盆過ぎまで毎日おこなわれました。朝３時に起きて、５時に草刈り場に着いて朝食をとります。一日に一反を刈って、刈った草は翌日ひっくり返しました。早い者勝ちで場所取りをし、山中の編小場（あみこば）で、草を束にして下ろす準備をしました。また、引き坂という草を下ろす道があり、いまでものこっています。山頂から五合目までは、カヤなどで草をくるんで引っ張り下ろし、そこからシュラ（修羅）に四束積んで、背駄（せた）にも四束背負って引っ張りました。

シュラをかつぐ人（上野区提供）

干し草は田んぼの肥料で、水を張って、生石灰を入れるとぶくぶくと泡が出て、発酵してよく腐りました。また、わらと混ぜて牛に与えました。この採草によって低木の生育が抑えられ、美しいお花畑が山の斜面一帯に広がっていました。

対山館の薬草の袋

薬草の利用

薬草は、滋賀県の「伊吹山薬草採集取締規則」（大正８年28種、昭和11年30種）があり、採る期間が決まっていました。上野では、草刈り場以外で、種が落ちた９月に採取がおこなわれました。薬草採りは、女性や子どもの仕事で、子どもも１日20束くらい採ったそうです。種類は、ヨモギ、トウキ、ジュウヤク、ウツボグサ、ゲンノショウコなどがわかりやすくて採取されました。風呂に入れる薬草を、家で干して、刻んでブレンドし、冬仕事として南京袋に入れて、大八車で長浜まで売りにいきました。また、対山館や滝沢さんなどの薬草問屋に買い取ってもらいました。山麓の小学校では、近年まで夏休みの宿題として薬草を集めました。明治39年８月、坂田郡教育会により牧野富太郎を講師に講習会が開かれました。大正時代には上野尋常小学校（うえのじんじょうしょうがっこう）や三合目に植物園が開かれました。

薬草講習会（明治39年／春照）

対山館長生園と高橋七蔵

「対山館長生園（たいざんかんちょうせいえん）」は、高橋七蔵さんにより大正14年（1925）上野に設立された旅館です。タイル張りの百草風呂（ひゃくそうぶろ）を売り物とし、薬草や山菜の集荷、植物標本や絵葉書の生産販売、玉突きなどの娯楽施設などを経営していました。明治39年の講習会で牧野富太郎との交友が生まれ、牧野は対山館を定宿としました。この出会で、七蔵は植物の学問的知識を学び、七蔵が発見したギボウシは、牧野によって「シチゾウギボウシ」と命名されています。対山館が扱った商品の中心は、古くから「百草湯」「百草薬」などと呼ばれ、ゲンノショウコ、ドクダミ、トウキ、ヨモギを基本に配合された「伊吹百草」の浴湯薬や健康茶です。さらに、これらの主力商品とは別に、驚くほど多くの植物が取引されていて、その数は205種におよび136種類がさまざまな薬用効果をもつ薬草です。種子、苗、株、標本のかたちで薬草園や薬局と取引され、その販路は東京から兵庫県にまでおよびました。

昭和30年代の伊吹山と近江長岡駅（上野区提供）

■信仰登山から観光登山へ

ライトは駅から山頂へ

今も昔も、伊吹山登山の拠点は三之宮神社（上野）です。伊吹山修験の一宿（いちのしゅく）として定められた中世にさかのぼります。江戸時代、幕府の採薬師（さいやくし）は上野に宿泊し、文化・文政の頃になると、修行者以外にも講を組んで各地の霊山を巡り、物見遊山を兼ねた名山登山が盛んとなり、伊吹山にも多くの人が登ったことが地誌にみえます。伊吹修験が廃れた近代には、先達（せんだつ）の伝統を受け継ぎ、近代登山の案内人として駄賃（だちん）を取って登山がおこなわれました。そして、関西で最初のスキー場として開発されると、昭和40年代には民宿村として空前の繁栄を迎えます。また、夜間登山のメッカとして、近江長岡駅から登山者が列をなしました。

関西最古のスキー場だった…

三合目に、中山再次郎さんの胸像が建っています。昭和39年、京都市長の意向を受け、伊吹村役場や実行委員会の協力のもと、区民総出で建立されました。大正２年（1913）、中山再次郎は、伊吹山がスキーの最適地であることを見出し、翌年12月23日から、一、二合目で関西初のスキー講習をおこないました。六尺余りの竹の先がとがった道具を携えた中山は、「シシ獲り」か「熊獲り」の風変わりな猟師に見えたそうです。ところが、２枚の板に足をのせて、矢のように雪の斜面を滑ると知って、上野の人は驚きました。好奇心旺盛な若者は、曲物（まげもの）の「とおし」を切ってコワ板の先に取りつけて、足に板をしばりつけて、滑りはじめたといいます。昭和２年には、還暦を祝い三合目に中山小屋が建設され、宿泊交歓の山小屋として多くの人から愛されました。伊吹山スキー場のはじまりです。

山頂の御来光（絵葉書）

スキー講習会（絵葉書）

石灰利用とセメント工場

石灰石は、日本で唯一自給自足できる地下資源です。伊吹山の石灰岩は上質で、江戸時代には太平寺や小泉、大久保、伊吹などで石灰窯（せっかいがま）が営まれました。

石灰窯（小泉）

敗戦からの復興への道を歩みはじめたなかで、山麓の人々の生活にあらゆる意味での転機をもたらしたのは、昭和27年に操業を開始した大阪窯業セメント伊吹工場の誘致です。この年、対米平和条約締結を機に国の復興再建が目指され、セメントは、砂糖、肥料とともに「三白景気（さんぱくけいき）」とよばれる好況を謳歌し、伊吹工場も拡張と増産が図られながら、昭和35年に全ての工事が完了しました。セメント工場誘致が産業経済に及ぼした影響は大きく、伊吹村、春照村（すいじょう）を中心に雇用者は500人に達し、29年の伊吹村予算は、24年の実に11倍に拡大しています。

エピローグ　いぶきやまといぶきさん　―里山と霊山―

平成12年に能登川町立博物館（東近江市）で、企画展「近江の霊峰　伊吹山展」が開催され、来館者に "あなたはどう呼んでいますか？"と問いかけるコーナーが設けられました。その結果、山の近くに住む人は「いぶきやま」と呼び、遠くに住む人ほど「いぶきさん」と呼ぶ傾向がわかりました。もちろん山麓の米原市では「やま」呼びです。身近な山（里山）は「○○やま」と呼ばれ、「○○さん」は、信仰の対象となっている山が多いといわれています。どちらの呼び方もされる伊吹山は、遥に拝む霊山「いぶきさん」であり、麓に住むものには里山「いぶきやま」なのです。

【伊吹山文化資料館】

伊吹山と資料館

子どもたちの体験学習

伊福山　法ノ泉の　湧出る　水汲ミ　神かとそ思ふ〔円空〕

円空は、伊吹山を汲んでも尽きない泉のように仏法(仏になる道)が湧き出る山と詠んでいます。米原市伊吹山文化資料館にとっても、伊吹山は汲めども尽きぬ素材の山です。自然、文化、民俗、歴史、考古、美術、文芸などの展示。さまざまな素材と、伊吹山に関わっている人たちとのつながりで、企画展、講座、体験教室を開催しています。

資料館は、平成５年に廃校になった春照小学校春照分校を改修して、平成10年に開館しました。そして、資料館のいちばん大切な宝物は「資料館友の会」です。伊吹山文化資料館が、いつまでも活気ある活動を続けていられるのは平均年齢80才のメンバーのおかげなのです。

会員は経験と知恵の宝庫。現役時代の技を生かした「モノ作り先生」や昔のことを話してくれる「おじいちゃん・おばあちゃん先生」が、子どもたちの体験活動をサポートし、窓口業務や清掃活動などをこなしていただき、いつ来ていただいても、花の活けられた気持ちのいい館内です。

薬草のサウナ風呂

滋賀県一の縄文の展示

友の会の会員による昔話や解説は、展示品に付加価値をつけてくれます。資料館に関わる方みんなが学芸員として支えていただいています。伊吹山をさらに深く知りたい方。ご来館をお待ちしています。

☆★主な参考文献★☆
伊吹町『伊吹町史　通史編上』『伊吹町史　通史編下』
『伊吹町史　文化民俗編』『伊吹町史　自然編』
市立長浜城歴史博物館『近江湖北の山岳信仰』（平成17年）
伊吹山奉納太鼓踊り保存会『伊吹山奉納太鼓踊り』（平成4年）
伊吹町教育委員会『伊吹山寺』（昭和52年）
村瀬忠義ほか『伊吹山自然観察ガイド』（平成19年）
竹田繁良『伝承地でたどる　ヤマトタケルの足跡』（平成24年）
米原市教育委員会『伊吹山と円空』『伊吹山と播隆』（平成25年）

【協力者・協力機関(敬称略)】
寿福 滋・小島梯次・黒野こうき・高橋健太郎・上野区・彦根城博物館・東洋大学

伊吹山文化資料館

所在地／米原市春照77番地
TEL・FAX／0749－58－0252

開館時間／午前９時～午後５時
（入館は４時30分まで）

休館日／毎週月曜日（祝日の場合は開館）
祝日の翌日
（日曜日、土曜日と重なる場合は開館）
12月27日～1月5日

観覧料／一般200円（20名以上団体160円）
中学生以下100円（同上80円）

米原市教育委員会　〒521-0242　滋賀県米原市長岡1050-1　TEL.0749-55-4552　FAX.0749-55-4556

伊吹山歴史略年表

5世紀頃		日本武尊神話（『古事記』『日本書紀』）
白雉 1	650	出雲井開削伝承（『岡神社社伝』）
白鳳 2	673	役小角が弥高寺を開基（『勧進帳』）
養老 7	723	夷服山と浅井岳の背比べ（『帝王編年記』）
—		藤原武智麻呂(680～737)の伊吹登山（『藤氏家伝』）
天平神護 1	765	天平神護年間(～66)泰澄が弥高寺再興（『勧進帳』）
宝亀 9	778	弥高榊之宮（平野神社）創建
天長10	833	仁明天皇が伊吹山に一精舎を建立し、薬師念仏を修させる（『三代実録』）
承和 3	836	七高山阿闍梨が春秋に薬師悔過（『口遊』、日本七高山）
嘉詳 3	850	伊富岐神に従五位下（『文徳実録』）
仁寿 1	851	三修、仁寿年中(～54)に伊吹山に至る（『三代実録』）
貞観 9	867	大中臣常道を派遣して伊福岐神社に弓箭鈴鏡を奉納（『三代実録』）
元慶 1	877	伊富岐神に従三位（『三代実録』）
元慶 2	878	伊吹山護国寺が定額寺となる（『三代実録』）
昌泰 2	899	三修が伊吹山で没す（『日本紀略』）
正暦 5	994	源頼光が伊吹山の盗賊を平定（『日本略記』）
貞応 3	1224	観音寺の伝教大師像成立（「像内銘」）
宝治 2	1248	大原重綱が出雲井開削（『根元記』）
正元 1	1259	観音護国寺が正元年間(～60)に現在地に移転（寺伝は貞和 3）
文永11	1274	観音護国寺鐘楼建立
徳治 3	1308	弥高寺と太平寺の和与状（『大原観音寺文書』）
嘉暦 2	1327	弥高寺・長尾寺・観音寺で中宮藤原禧子の御産祈祷（幕府調伏）（『大原観音寺文書』）
元弘 3	1333	京極道誉が守良親王を奉じ太平寺から出兵し、番場で北条軍を討つ（『太平記』）
文和 1	1352	文和年間(～56)、深宥が長尾寺を再興（蝉合伝説／寺伝）
応安 2	1369	観音寺山伏と行信律師の相論（『大原観音寺文書』）
応永 1	1394	観音寺が青蓮院門跡の令旨により法相から天台に改宗
応永 7	1400	太平寺・長尾寺・観音寺が弥高寺を訴える（『大原観音寺文書』） 三宮を一宿とし、弥高寺・長尾寺の山伏を追放（『大原観音寺文書』）
応永11	1404	伊崎五ヶ寺が弥高寺を支援（『大原観音寺文書』）
応永13	1406	乗々院が弥高寺を認める裁定（『大原観音寺文書』）
永享10	1438	弥高寺が一宿は三宮と認め三ヶ寺と和解（『大原観音寺文書』）
享徳 1	1452	観音寺を一山の会合に定める（『大原観音寺文書』）
明応 4	1495	京極政高が弥高寺から出兵（『船田後記』）
明応 5	1496	京極高清が弥高寺に布陣（『今井軍記』）
明応 7	1498	松尾寺梵鐘鋳造（刻銘）
明応 8	1499	弥高護国寺焼失
永正 1	1504	京極高清が上平寺を城塞化（永正年間） 永正年間(～1520)、長尾寺、上平寺が兵火にかかり焼失
永正 9	1512	弥高寺が失火により焼失（『弥高護国寺勧進奉加帳』）
永正10	1513	『弥高護国寺勧進奉加帳』成立（「奥書」）
大永 3	1523	浅井氏等が上平寺城を攻める（大吉寺梅本坊公事）
享録 2	1529	京極家奉行人山田氏、大津氏が上平寺再興を神照寺に申し送る（「区有文書」）
天文 5	1536	『伊福貴大菩薩奉加帳』成立（長尾寺16坊、弥高寺47坊、太平寺36坊、松尾寺27坊、上平寺30坊などが見える）
天文 7	1538	京極家奉行人黒田氏、多賀氏が上平寺密蔵院領安堵を神照寺に申し送る（「区有文書」）
天文 9	1540	『伊吹三宮奉加帳』成立（弥高寺16坊、太平寺35坊、松尾寺 6 坊などが見える）
元亀 1	1570	織田信長の進攻に対し、上平寺城開城
天正 1	1573	天正年中、長尾寺が兵火にあう（『伊吹町史』）
天正 8	1580	弥高寺が小弥高に移転、本坊ほか六坊再建（『伊吹町史』）
文禄 4	1595	石田三成が上平寺の寺領安堵
慶安 2	1649	悉地院に井伊家から山林寄進、北野寺他 7 ヶ寺から最勝王経奉納、六坊が現在地に移る
慶安 4	1651	長尾寺不動立像を修理して新放生寺に移座
貞享 1	1684	貞享年間(～88)黄檗宗秀水が松尾寺再興
元禄 1	1688	旧弥高寺山内阿伽井谷の岩窟に開山堂建立
元禄 2	1689	大平観音堂十一面観音立像成立（円空作、「背面墨書銘」）
元禄 5	1692	悉地院が長浜総持寺客末、五ヶ院家。真言宗豊山派に転宗
正徳 4	1714	舎那院不動立像修理（もと長尾寺安置／背面朱書銘）
明和 5	1768	悉地院本堂再建
文政 6	1823	播隆が伊吹山で修行（～1826）
文政 7	1824	大原幽学が松尾寺の提宗に師事する
明治 9	1876	長尾寺大火
明治42	1909	姉川地震で伊吹山が一部崩落
大正 3	1914	中山再次郎が伊吹山でスキーを指導
昭和27	1952	大阪窯業セメント伊吹工場操業開始
昭和39	1964	太平寺集落が春照に集団移住
昭和42	1967	松尾寺が旧地に再建